
転生！？ギーシュ・ド・グラモン珍道記

キース

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生！？ギー・シユ・ド・グラモン珍道記

【NNコード】

N3985M

【作者名】 キース

【あらすじ】

バイクの事故で死んだはずの青年が何の因果かゼロ魔の世界に転生されました。しかも女好きで有名なグラモン家の四男坊ギー・シユ・ド・グラモンに生まれ変わり、原作知識と御馬鹿な性格でハルケギニアの世界を練り歩き混乱を生み出していくます。

さて、彼はこの世界で何を見て、何を残すのか？それとも何も残さないのか？

今、一人の馬鹿がハルケギニアの世界に挑戦します。するのか？

プロローグ（前書き）

はじめまして、初投稿です。

日々の仕事の疲れとストレスをSNS等を読んで癒されていましたが、読んでいるうちに自分も書いてみたくなり投稿させていただきました。

まず、私こと作者は小学生の頃から作文や小論文が苦手で、誤字脱字などありましたらご容赦ください。もし誤字脱字を発見されましたら、指摘してください。喜び勇んで直します。

そして、この作品は色々な漫画や小説等クロスします。

ただ単に作者の趣味と愛と独断と偏見です。温かく見守つて下さると嬉しいです。

最後に、クロスさせるにあたり、 Wikipediaなどで調べたりしますが、それでも知識が足りなくなるかもしれません、こちらもご容赦ください。

プロローグ

俺、渡部 明は空を飛んでいた。

友人達と日帰りツーリングした帰り、目の前にキツネが出てきた。キツネをかわしたがいいが、バランスを崩し転倒したようでよく覚えていないが、痛みより、（熱）と感じた。

空を飛びながら月が見えた。

「・・・きれいだねー」と 渡部 明 最後の言葉を言った。文字や言葉で表現できない衝撃とともに 渡部 明 の人生は終わった。

地球での人生は

fin?

ハルケギニア トリステイン王国

深夜、グラモン家の屋敷に赤ん坊の泣き声が鳴き響く。

「旦那様！、旦那さまーーー！ お生まれになりましたーーー！ 元気な男の子ですーーー！」

「生まれたか！ まさか4人目まで男の子だとは、これもグラモンの軍人の血か。

・・・一人くらい娘がほしかった。 ハーアー・・・・

そう言って男性は軽く俯きながら部屋をあとにする。

「あなた、生まれましたわ。元気な男の子です。」

「我が家よ、ご苦労様。そしてありがとうございます。」

男性は言い終わると女性の頬にキスをする。

「あなた、それでこの子の名前は？」

「ふむ。女の子がほしかったから、女の子の名前しか考えていないなー。マリア、ベアトリーチュ、ラベンナ、サン德拉、リリアー

ヌ・・・」

「・・・あなた、私の記憶ちがいでは思いますが、今仰った名前はあなたが今まで浮氣した女性の名前だと、オ・モ・イ・マ・ス・ガ？」

瞬時に女性から怒氣が立ち昇る。

「つへ？ あ、あー 男の子な名前だつたな！？ うー ガ、ギ、ギ、グ、ギー・・・」

「ギー？」

「やうだー！この子の名前はギーシュだー、ギーシュ・ド・グラモン！

！—」

威容にイケメンな外人のオッサンが俺を抱き上げながら

「この子の名前は、ギーシュ。ギーシュ・ド・グラモンだー！」「と

叫んでる。

（なんだー？このオッサン、日本語上手いなー、それにでかいなー、俺は170センチはあるんだぞ？・・・あん？なんか体がおかしい？・・・あれ？アレエエエエー！？！？）

そこで、体の異変に気づいた。

（なんじやあ）りやああああー！？ あ、赤ちゃんになつてゐううううううー！？！？

俺は、某体は子供、頭脳は大人な探偵じゃねええええぞ！－
そこには、鏡に写るイケメンのオッサンと、赤ん坊の姿であった。

朝方、俺は赤ん坊ようの柵付のベットで寝かされていた。
どうやら、いつのまにか寝ていたようだ。

（さて、俺は渡部 明なはずだ。それがなんで赤ちゃんになつてゐ
んだ？ しかも

俺のことを、ギーシュって呼んでたよなー？ ギーシュって確か・
・ゼロ魔の女好きな馬鹿じやなかつたつけ？）

一眠りしたお陰か、冷静に物事を考えられるようになつていた。

グーギュルル

腹の底から物凄い音がした。

（あー、腹が減つたー。おーい、早く起きろー。可愛い赤ちゃんが
腹減らしてんぞうー）

俺は部屋中に響くほど大声で泣き喚いていた。

「はいはい、オシメかしらオッパイかしら。男の子はやっぱ元気
ですわね。」

俺の鳴き声でたたき起こされたにも拘らず、母親らしき女性は慈愛
の眼差しを俺に向けていた。どこの世界でも母親とは一緒のようだ。
（ハアー、まさかこの年で母乳プレイをするはめになるとは・・・
つて、俺つて今赤ちゃんじゃん！ プレイじゃないじゃん！－ ジ
ヤンジヤン！－・・・ツマンネー）

独りで馬鹿なことを考へて居るこの赤ん坊は、ゞこの世界を探して
も今一人しか見つからぬであります。

母乳を飲み、オシメを換えてもらつた赤ん坊はスヤスヤと寝ていた、
表面上は。

（とりあえず、俺はギーシュ・ド・グラモンなのかー。つーことは、
15、6年後には才人が来て、大冒険が始まるんだなー？ まったく
、小説にハマつてよかつたねー。こんなことなら、アニメもぢや

赤ん坊の体が睡眠をほしがって、欠伸をした。

(セ) ねむに、したら寝るかー。あー、早く成長しねーかなー。

そして赤ん坊は深い眠りについた。

この時、IJの赤ん坊は自分を中心に世界が、原作とは異なつていいくことはまだ知りようもない。運命の歯車に「彼」という歪な歯車が組み合わさつて。

力チ、力チ、力チ、ツギギ、力チ、力チ、力チ・・・

バカが学院にひそひそしてきた！？

トントン

部屋の扉がノックされている

「若様、起きて下さい。若様？」

ガチャ 扉を叩いていたメイドが部屋に入つてくる。

「若様、今日はご出立の日です。いいかげん起きて下さい。」

「うー、だーかーらー朝起こすときは、静かに ハラで・・・

「潰しますよ？」

俺は瞬時に起きた。

「ごめんなさい！起きました！冗談です！－－－ だ、だから・・・

アイアンクローは・・・

いや、イヤアアアアアアアアアアア－－－－－

朝の身嗜みを整え、朝食を食べに部屋に入つたら父親がいた。

「おはようギーシュ、またスゴイ声だつたな？」

「おはよう親父、・・・顔に手の跡がついてんぞ？」

そう、父親の顔にも俺と同じ跡がついていた。

「うむ！ 朝寝ぼけて抱きついたからな！！ 目覚ましにアレはい－－－！」

「朝から何男一人で、馬鹿話をしているのかしら？ おはようギーシュ、おはよう貴方。」

俺の後ろから母親も入つてきた。

「おはよう、母上」

俺は朝の挨拶もそこそこに席に座りついた。そこへ、

「なあギーシュ、長年の疑問だったのだが、なぜ私には父上と呼んでくれないのかね？」

「そりやー、なんとなくだよ。親父」

俺はそう、そっけなく答えた。

「ハアー、ギーシュがそう呼びだしてから、上の二人まで真似をして。父上と呼ばれていた頃、がなつかしい」

親父が黄昏ているなか

「ふふ、朝食をすましたらギーシュのお見送りですわよ。元気を出してくださいな。」

そう、今日はトリステイン魔法学院の入学式の前日。待ちに待つたときがきたのだ！

今俺のテンションだつたら、コンペイトウに核弾頭を撃ちこめに逝ける！…田ザクで…！

屋敷前の広場に俺と両親、メイド達、そしてグラモン領の平民の子弟達が集まっている。

「リーダー、魔法学院に行つても俺たちのことを忘れないで下さいよ？」

「学院で貴族の馬鹿息子なんてシメちまえ！」

「んー？ それってギーシュの兄貴もシメちゃうのか？」

「そうか！ よし、みんなやっちまえ…！」

「だめ！ ギーシュさまは私と結婚するの…！ そして私も貴族に…・うふふふ

「そんな！？ メアリー、僕の気持ちは…・・・

「トム、あきらめる。な？」

「とりあえず、ギーシュを殴ろ！…！」

「賛成！ 賛成！ 大賛成！…！」

「ヒヤツハー」

「・・・馬鹿ばっか

俺を取り囲んで騒ぐ気のいいやつらを見て両親が微笑んでいる。いや親父だけ複雑な顔をしていた。

「まったく、ギーシュも変わっているがこの子たちも変わっているなー。貴族と平民というのは…・・・」

「あらあら、よいではないですか。ギーシュも姫さんも本当に楽し

そうなのですから」

両親がほのぼのしているのを他所に、俺は皆に追い掛けられていた。

「ぜえぜえ・・・ふーー よしーそろそろ行くぜー！」

俺はメイドから渡されたタオルで汗を拭きながら叫んだ。

「うむ、道中気をつけるんだぞ。あと、この私がデザインした服を持つていけ。」

「そんなヒラヒラした服なんて着れるか！」

また落ち込んでいる親父を放つておいて、一人のメイドが、

「若様、再度確認いたします。水辺には絶対に近づかないで下さい。お風呂も長湯はしない・・・」

「わかつてると、それは俺が一番わかつてるから。」

「ならば結構です。」

安心したのか素直に引き下がるメイド。入れ替わりに母上が、

「そういえばギーシュ、貴方、学院までどうやつていくの？あのスゴイ音がする乗り物でいくのかしら？」

「いや、今日はあいつに乗つていくよ。・・・単車はちょっとね？」

そう、このハルケギニアの世界で俺はバイクを発見した。なんとグラモン家の蔵、というか日本の「軒家」一つ分の大きさの納屋にあつたのだ！発見した時は思わず、歓喜の涙を流した。どうやら先祖様が集めたものらしい。

中に在ったのは、壊れたディオ、エンジンの無いゼファー、そして、完全な状態で走行可能なRZ350！あのナナハンキラーがあつたのだ！固定化の魔法が掛けがあるので保存状態もよし！魔法万歳

2スト最高！ー！ー

俺は懐から小さな笛を取り出し、思いつきり吹いた。

。。。。。。。

屋敷の近くの森から一匹の幻獣、グリフロンが飛んでくる。俺の側に着地したグリフロンを撫でながら、

「よひ、バド。今日は頼むぜ？」

「ギュワ、ギュワ。」

俺が子供の時にひろつたこのグリフォン。何でも数百年に一度しか生まれない金色の爪をもつレアなグリフォンらしい。母上におねだりし、親父を脅して飼うのを認められた。名前は俺の趣味、いいだろ別に。

「荷物はそれだけなのか？私が学院に入るときは馬車三台分はあります？」

いつのまにか立ち直っていた親父が尋ねてきた。

「ああ、何か必要だつたら取りにくるさ。それと親父わかつてるよな？俺がいなからつて、またツケや借金をするなよ？あと、店の経営・・・」

即座に、メイドが応える。

「ご心配ありません。私がきつちり見張っています。」

「なら、平気だな。」

俺はグリフォンに跨り、見送る皆の顔を見た。

「母上、そして父上行つてきます。そんで・・・行つてくるぜ！ヤロウヤモ！」

「つおおおうう！？妻よ、聞いたか！？あの、ギ、ギーシュが私のことを父上と・・・！？」

「ははは、よかったですわね」

親父が泣き出した。サービスしすぎたかな？それを見て微笑んでいる母上。

「リーダー！道中気を付けて下さー。」

「彼女なんか作んなよー。作つたら殺しに行くかんなーマジで。」

「お土産忘れるなよー」

「途中で落ちるー」

「ギーシュさま、花嫁修業をしながらお待ちしております。」

「メアリー、僕は・・・」

「トム、もう無理だ。」

「ヒヤツハー」

「・・・氣を付けて・・・」

俺はグリフォンを飛立たせ、屋敷の上空を旋廻し、一路トリスター
ア魔法学院に向かった。

トリスターア魔法学院に向かう街道の上空を一匹の幻獣、グリフォンが飛んでいた。

「ふわー、空の旅もやつぱいもんだねー。のんびりまつたり天氣もいいし最高だねー、お前もそう思つだろ?バード

「ギュワ!」

バドを撫でながらそう呟いて何気なく下の街道を見た。

「お、あの馬車の紋章は・・・」

俺はバドを降下させ馬車に近づいた。

「おーい、マル!マールーー!」

「マルじゃない!僕の名前はマリコヌルだ!・・・ってなんだギーシューか。いい加減にその呼び方はやめてくれ。」

「いいじょん別に。俺らはダチ「コウジょん!」

「ハアー、学院でも君がいると思うと、また面倒なことが起る」と僕は確信できるんだよ・・・

「褒めても何もでないぜ?」

「褒めてないよ!だいたい、その髪型はなんだい?あとマントも?マルもとマリコヌルは俺を変なモノを見る目で見つめてくる。」

「イメチョンだよ、イメチョン!高校デビューはイメチョンの時期だよー!」

「コウコウデビュー?なんだいそれは?」

「違った、学院だよ。魔法学院デビュー!」

今の俺の姿はヒラヒラした服でもないし、ふわっとした髪でもない。学院指定のシャツを第二ボタンまで開けて、全ての髪の毛は天を穿つトンガリヘアー、そしてマントの裏地にはバイオリン観音鯉づく

しの刺繡入り。本気の兄貴、背中のモンモン借ります。

「つと、見えてきたぜ。トリスターニア魔法学院だ。ふつふつふつ、楽しい学院ライフになるといいなー。なあ、マル？」

「・・・僕はもう実家に帰りたいよ、ハア。」

頃垂れているマルを放つておいて、俺は一人ワクワクしていた。
「待つていろよ？ 大冒険！ ギヤハハハハハハハハハハ！」

「ハアアアアアアー。」

また、溜息をだすマルもといマリコヌル。

エンディング
【バカ・ゴー・ホーム】

バカが学院にやつってきたー？（後書き）

ゼロ魔の w.i.k.i で、ギーシュの紹介の所でキャラクターのなるものにグリフロンを飼っていたとあったので、二二二二二や youtu で探したのですが見つからなかつたです。よつて、作者の趣味でやつちやいました。グリフロンの名前を考えていたとき、これしかないなと。気分は内海さんです。

あとは、マントの刺繡のネタ、知つてる人はいるのでしょうか？このネタ元は俺の聖典です。分かつてくれる方がいてくださいたら、作者は本望です。

馬鹿と青赤「ン」と金髪と

翌日、アルヴィーズの食堂 入学式

2階から落ちてきたオスマンのじいさんを見ながら
「相変わらず、あのじいさんはファンキーだなー」

と俺は呟いた。それに反応したのは隣に座ったモンモランシーだ。

「あら？ ギー・シユ、貴方オールド・オスマンを知っているの？」

「ん？ ああ、うちの顧客だからねー。」

客という言葉に嫌悪の反応をするモンモランシー。

「あの商売まだやつているの？ 貴族なのだからいいかげんに、終
わりにしたら？」

「しかたねーだろ？ うちのクソ親父が作った借金はまだあるし、
新しい商売を始めたから、まだまだ金はいるんだよ。」

ここで話されている商売とは銅像売りである。が、ただの銅像では
ない。

俺の知識とグラモン領の士メイジ達総力で作ったフィギュアである。
ラインナップはメイド系、リリカル系、ガイナックス系の女性キャラ
総出演である。最初の言葉に【淫らな】とつくが。最初はトリス
ティン貴族に細々と売っていたが、次第に話題になり今ではゲルマ
ニアからも注文がくるほどだ。まったく、どこの世界でも人気があ
るもんだ。

「つと、なんだか騒がしいなー？ なんだー？」

「あそこみたいね。あれはヴァリエールの・・・」

モンモランシーが見ている方向を向けば、騒いでいる赤髪と桃髪、
そして黙っている青髪。

（見つけた 見つけた 主要キャラも 来年が楽しみだねー。ケ
ーケツケツケツ）

俺はもの凄い笑顔になつてゐるのだろう。その顔を見たモンモランシーは、

「・・・ギーシュ？ 今凄く悪い顔してゐるわよ。まさかあの三人にシーは、
！？」「

「あー？ なんだよ、心配するなつて？ 俺がハニーつて呼ぶのはお前だけだから。」

「どうだか。お父様からグラモン家の男は信用するなつて言われているんだから。」

（そつぽを向くモンモランシー＝ハニー。

（まったく。グラモンだからって信用ねーなー。それにしても可愛いねーハニーは。）

俺がこんな風になつてしまつたのは単純だ。一目惚れしてしまつたのだ。それとも原作のギーシュの魂が求めたのか？まあいや、俺は惚れちまつたのだから。

出会いはガキの時、両親がどこぞの貴族に会いに行くのをめんどくさがつた俺も強制連行で連れ去られ、行つた先がモンモランシ領だつた。開拓に失敗したハニーのパパを慰めにきたらしい。

モンモランシの屋敷で出会つた瞬間【ビビッ！】ときた。クルクルした金髪ドリル、子供ながらキリッとした眼、そして、かまつてくれなきや寂しいオーラ！ それからの俺は、両親がモンモランシ領に行くときは必ずついて行く、そんで今にいたる。

入学式も終わり数日後。

俺は昼飯を食つて終つた後、イライラしながら中庭を歩いていた。

（ダーリー！ イライラする！ 単車に乗りてーー！ かつとばしてーなーーー！ 次の休みに取りに行くかー？ あーでもゼロ戦の前にハゲに見せても平気かなー？ あん？）

物思いに耽つていた俺の目の前に、決闘だ試合だの騒いでいる見知つた貴族の馬鹿共と青髪の少女がいた。とりあえず、ストレス発散

のために馬鹿共に喧嘩をすることにした。

「なんだなんだー？ 一人の女に数人で取り囮むなんて、いつからブルースクウェアの糞つたれ共は糞以下になつたんだー？ なあー ヴィリエ君よー？」

その声に驚き振り向く、ヴィリエと取巻き達。

「なー？ 貴様はギーシュ！ 貴族の誇りも無いお前に関係ない！ ドット風情が口を出すな！！」

「そのドットにボロ負けしたのは誰だつたかなー？ ヴィ・リ・エ・ チヤ・ンよ？」

「…・・・いいだろづーまずは貴様から倒してやるーーー！」

「そうこなくつちや。ククク」

俺とヴィリエは10メイルほど離れて対峙した。

俺は杖を抜く

「テメエ程度ならこれで十分だ。出て来い俺の玩具よ！」

そう言いながら、俺はゴーレムを練成する。1・8メイルほど濃いグリーンの鋼鉄のボディ、右肩にだけ付いたアーマー、そしてピングに輝く可愛いモノアイ。旧ザクだ！

「さあ！ 殺ろうか！！」

俺は旧ザクに余裕をもつて走らせる。

「そんな木偶人形、今度こそ吹き飛ばしてやる！ ウィンド・ブレイク！！」

風の魔法が旧ザクに迫るが、難なくかわす。そして、旧ザクを先ほどの倍の速さで走らせる。魔法をかわされ驚愕するヴィリエ。

「なー？ は、速い！？」

「素人め、間合いが遠いわーーー！」

俺は言い終わると同時に、旧ザクの必殺技「ショルダータックル」をヴィリエにぶちました。

「つーえ・・・！」

変な声を出して3、4メイルは吹つ飛びヴィリエ。立ち上がりうと

するが胃の内容物を吐き出してそのまま倒れた。昼食はパスタだったようだ。

「しつかりしるヴィリエー！」

「大変だ！泡吹いてる！－！」

「メティック！メティック－－ク！－！」

ヴィリエの周りで騒ぐ取巻き達。レビテーションでヴィリエを医務室に運ぶようだ。

「－－憶えていろ！」－」

そつ言つて逃げ出す馬鹿な取巻き達。お約束ありがといひざこまーす。

「H A H A H A -俺 is 最強！イデツ！-？」

後ろを向くと青髪の少女タバサがいた。持つてている杖で頭を殴られたようだ。とり合えず、抗議しよう。

「いてーな！何すんだよ！-？」

「・・・やりすぎ。」

どつやら説教されているようだ。俺はすかさず言い返す。

「いいんだよ！あのバカもこれで少しは懲りたる。」

「・・・どうして？」

「どうして？あー、俺が何であるバカにケンカ売ったかつてことか？」

「・・・そう。」

次は疑問をなげてくる。

（しつかし、本当に無表情やなー。こちよばしてみるかな？・・・やめとこ。）

俺は湧き上がる好奇心を押し殺し、眞面目な顔で冗談半分に答えた。
「そりゃー、ストレス発散の為！そんで、女の子に絡むバカはボコッていい国法があるから！」

「・・・そんなのない。」

滑つた。俺は落ち込みながら話を変えることにした。

「まあ、いいじゃん！ それに、あのブルースクウェアのバカとは前からケンカしてるしー。」

「・・・ブルースクウェア？」

私は何故このいきなり現れた男の頭を叩いたのだろう。何故か体の底から『しなければならない』気がした。

貴族の子弟とは思えない言葉使いと態度、まるで平民の子供だ。いやチンピラか。

今、目の前の男はブルースクウェアの説明をしている。

「ブルースクウェアつーのは、貴族の馬鹿息子共で構成されているチームで、ヴィリエの奴はその頭だったんよー。まあ、去年俺達ダラーズが潰したけどな あー、ダラーズつていうのは俺が作ったチームで、貴族と平民のガキがダラダラ集まって遊びまくつてるだけのチームだよん 皆いい奴、おもろい奴だから あーでもヤバイのが何人かいるけど・・・」

長々と話していたと思つていたら急に頃垂れ始めた。ブルースクウェアの説明から、いきなり自分達の話になり説明になつていて思つたが気になることを話していた。

貴族と平民の子供が遊んでいる。そんな話などガリアでは聞いたことが無い。このトリステインだけの話だけなのか？ゲルマニアでは？答えの出ない問題を一端保留にして、私は彼が腰に付けている“杖”らしきものを見た。

それは全てが金属でできた平民が使う“銃”的に見えた。

「ん？ これかい？ へー、『こいつ』に興味があるんだ。」

そう言いながら、私の目線の高さに持ち上げた。

「こいつは“S & W M 03 A 7 H A T E S O N G”で云うんだ！ へへーん、すげーだろ？ ここにナイフも付くんだぜ！」

何がすごいのかまったく分からぬ。そのまま、私が黙つて見ていると

「むー、これの凄さが分からぬかー。残念やなー」

「・・・何故平民の武器を杖にするの?」

私がそう疑問を口にすると、

「魔法が使えなくなつたらそのまま武器になるじゃん? まあ、あとは俺の趣味だね。なによりカッコイイじゃん!」

確かに理に適つてゐる。私も何度か杖での接近戦を経験しているから理解できる。それが“銃”ならなおさらだ。

「さて、邪魔しちまつたようだし俺は行くわ。じゃーなー“タバサ”ちゃん!」

と、歩き去つていく。まだ、尋ねたいことがあるの? はて? 私は何時名前を名乗つたのだろう?

(やべーやべー、つい名前を呼んじまつた。気を付けとかねーとな。さて、どうすっかなー? ハニーのどこで行くか? それともマ

ル達のどこにすっかなー)

俺は廊下を歩きながらどう暇を潰すか考えていた。そこに後ろから声をかけられた。

「あら、さつき決闘してた方じゃない。 フフ ねえ、お名前を教えてもらえるかしら?」

「あ、あーギーシュ・ド・グラモンだ。それで貴方は?」

振り向き返事をする。そして目に入るのは、派手だが美しい赤髪、意思の強そうな目、このトリスターニアでは珍しい褐色の肌、そして男の口マンを搔き立てる見事な巨乳! ああ、谷間が素晴らしい! -

「フフッ。キュルケよ。キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フオン・アンハルツ・ツェルプスター。名前から判るとおりゲルマニアからの留学生よ。」

俺は谷間から目を離しキュルケの顔を見た。

「ゲルマニアのツェルプスター家ならよく知つてゐるぜ。戦争が始まつて、先にヴァリエール家とドンパチするからな。」

「あら、よくご存知ね。」

「一応、軍人の家系なんでね。」（原作読んでたもん。当たり前じやん）

「グラモン家ならこっちでも有名よ。一族の男は全員女好きってね。

「グハツ！」

俺は精神的ダメージにより倒れかける。
まさか、ゲルマニアまで汚名が広がっていたとは、怨むぜ！」先祖様
あとクソ親父。

「普普ツ！大丈夫？」

「だ、大丈夫だ。そんで？ その女好きなグラモンの息子になんか
ようか？」

「決闘を見たのよ。そして貴方に『微熱』が反応したの。どう？今
夜私の部屋でワインでも飲まない？」

俺は返事に詰まつた。確かにキュルケに近づくメリットはある。しかし、二人つきりはまずい。いくらキュルケが本気で男として見て
ないとはい、非常にまずい。

俺はどう返事をしたらいいか迷つてゐる中、キュルケの後ろ、廊下
の曲がり角に金髪ドリルがピヨコと出でているのを発見した。
（ああ、ハニーは可愛いなー。あんなところに隠れてバレてないと思
つてるなー。

あ！ いいこと思いついた！…）

なによ？ わつさとOKしなさいよ。このあたしが誘つてるのよ？

フフツ、それともあたしの魅力が強すぎるのかしら？ まったく
罪な女だわ。

どこの国でも男なんて全部一緒。あたしが一声かけるだけで、フラ
フラ寄つて来る。

今日の前にいる男だつて女好きで有名な家系だし、すぐに墮ちるだ
ろう。もうこれで何人目だつたか？ 七人目、いや八人目だつたか？

「残念だが、誘いは遠慮しとくよ。」

「じゃあ、私の部屋に・・・って？ ハエツー？」

「なんで！？ なんで誘いに乗らないの！？ もしかしてここにひつてゲイな人！？」

「な、何故かしら？ 理由を聞かせてもらえる？」

「ああ、今教えてやるよ。」

「ヤリと笑いゲイ？ な男は何故かあたしの後ろに歩いていく。足音を発てないよう」。もし本当にゲイだつたらダッシュで逃げよう。そして一度と近寄らないようにしよう。

こつそりと曲がり角に近づいたと思つたらいきなり手を突つ込んだ。「キヤツ！？」

悲鳴と共に一人の金髪の女性が肩を捕まれながら出てきた。よかつたゲイじやなかつた。

「ジャジャーン！ 紹介するぜ、俺のハニーだーー！」

「ちょっと、ギーシュ！？ なにするのよ！？」

どうやら立ち聞きしていたようだ。とりあえず、からかうことにしますか。

「あら、トリステインの淑女は人の話を立ち聞きするのが作法なのかしら？」

「ち、違うわよ！ ギーシュが貴方の誘いに乗るなんて、す、少しも思つてないんだからー！」

訊いてないことまで話す前の前の女性とさつきから一ヤーヤーしていれる男。なんだこの二人？

「だいたい、ギーシュが・・・フグツーー？」

「・・・え？」

今、あたしの目の前で行われているのはなんだらう。金髪の女性が話していた途中で、いきなり男のほうが女性の唇にキスをしだした。しかも強引に舌を絡ませている。

ピチャピチャと廊下に響きさせながら、五分ほどたつて女性が立つていられなくなつたのか尻餅をつく。すかさず男がお姫様ダッシュで抱上げ

「じゃーねー」

ニッコリと笑いながら去っていく。

今は何だったのだろう？

あたしはしばらく呆然としていた。廊下の窓は開いていないのに何故か北風が吹く。

今日はもう寝よう。

（んー？上手く誤魔化せたかなー？ ふんふん、にしてもハニーはいい香りやなー、襲っちゃいそうだなー）

俺はハニーの部屋に向かって歩いていた。お姫様ダッシュしながら。途中誰にも会わなかつたのは今が授業中だからである。ハニーは俺の腕の中ですつと黙つて俯いている。

（やっぱ、無理矢理キスしたの怒つてるかなー？でもなーキュルケから逃れるにはアレがいいと思ったしなー。あーでも、ハニーの唇はやっぱいなー。マジで押し倒しそうになつちまつたし。・・・ 今夜のオカズはこれだな！）

と、アホなことを考えているうちに部屋の前に着いた。ここで問題が発生した。両手が塞がつているので杖を抜いて“アンロック”的魔法もドアノブも回せない。ハニーを下ろせばいいのだが、そんな勿体無いことができるか！－

俺は仕方無く、

「ハニー？ ドアを開けてくれると嬉しいんだけど。」

黙つたまま杖を取り出し魔法を唱えドアを開けてくれるハニー。そして部屋に入つた瞬間ハニーが付けている香水と同じ匂いがした。部屋の中は女の子らしく綺麗に整えられている。ちなみに、俺の部屋は入居三日目にして腐海の森となつてしまつた。王蟲はいないが、俺が趣味で集めた書物や小物、武器や鎧が乱雑に置いてあり、メイドが掃除できなくなつてしまつたのだ。

俺の部屋の話はほつといて、今はハニーをビビつするかだ。

とつあえず、ベットの上に座らせる。そしてハニーの床の前で土下座をする俺。

「「めん! あんなところで無理矢理キスをして… でも、ハニーを思う気持ちはマジだから…」」

「…」

俺の謝りついでの告白になんも反応しないハニー。本当に嫌われたかな?

「本当に「めんな。」

「…」

「それじゃ、そろそろ行くよ。このままいたら、ハニーの「」と襲つちまいそうだし。」

俺が部屋を出ようと振り向いたとき、後ろから小さな声が聞こえた。

「…・わよ。」

「へ?」

ハニーの方に振り向くと、顔を真紅に染めながら
「ギ、ギーシュになら、お・・・襲われても、うれし・・・」

「ハアアアアアアニイイイイ! ! ! !」

俺はハニーが言い終わる前にルパンダイブでハニーに襲いかかった。

「キヤツ! !」

ハニーは俺に押し倒されて真っ赤になりながら

「あ、あの、ギーシュ。 私、その・・・初めてだから・・・やさしく・・・して。」

「ああ、俺も初めてだから気にすんな。」(この人生ではね)

昼下がりの魔法学院に一匹の狼の遠吠えが鳴り響いた。気がする。

授業中の教室

風の使い手ギターによる、とても為にならない話を聞き流しながらマリコヌルと数人がコソコソ話している。

「なあ? ギーシュとモンモランシードこいつたんだ?」

「昼食後、見てないな。」

「ヴィリエをぶつ飛ばしたの見たぞ。」

「そのあとは？」

「知らん。」

「・・・まさか一人で“ヤツテル”なんてな？」

「まさか！あはははは・・・」

「・・・「だとしたらぶつ殺す！――！」」

今日も平和な魔法学院の一日でした。めでたし。めでたし。

馬鹿と青赤ハッシュと金髪と（後書き）

どうも！

次話投稿に一ヶ月近くかかってしまいました。もうね、仕事がやばすぎて書く暇がなくて少しづつ書き溜めていたらこんなに経ってしまいました。

そして、気づけばアクセス数が一万突破していました。本当にありがとうございます。お気に入り登録された方も本当にありがとうございます。

これからも粉骨碎身書き連ねるので、見てくださいーーーお願いします！

戦う先輩と舞踏会

新入生歓迎の舞踏会。

貴族の嗜みとして社交界にてビューアーするための練習として、または、上級生が新入生に貴族の“格”を見せる場所であった。

の、だつたはずが

「なにやつてるマリコヌル！お前の腹は見掛け倒しか！！」

「おい！あの青髪の新入生凄いぞ！？いつたい何人前食つてんだ？」

「ギーシュ！有り金全部お前に賭けたんだからな？死んでも勝てよ！」

「ギーシュ勝つたらご褒美よ～」

そう、彼らは挑戦していた。己の自身と胃袋に賭けて。

「も、もうだめだ。・・・うふ」

また一人、“挑戦者”マリコヌルが倒れた。

マリコヌルを合わせ、すでに十数人の屍が会場内に倒れていた。

「ムグムグ。やるなータバサちゃん！大食いで俺について来れたのは、君が初めてだよ。

ングング、もし俺に勝てたら“ギャルソネ”的号をあげるよ！」

「・・・いらない。」

「にしても、ズズー、この鶏のソテーは絶品やな！ おかわり！！」

「・・・おかわり。」

そして、一騎打ちになり会場はさうにヒートアップする。
彼らの伝説は始まった。

「だー！食つたー！そんで負けたー！！」

会場の隅の椅子に、だらしなく座り腹をポンポンと叩いている。

「ちょっとギーシュ！オジサンくさいからやめて！」

俺の右隣に座る金髪ロールの女性が奢める。

「うつ！？ごめんよハニー。」

（はあ～、前世も足したら俺ももう四十か。・・・オッサンだな～）
「というか、なんでギーシュは毎日あんなに食べているのに太らないんだ？そして、なんでこんなイベントになつていたんだい？」
左隣に座り元より大きな腹をさらに大きくしたデブ、マリコヌルが疑問を口にする。

「デブじゃない！ポツチャリ系だーーー！」

「なにいきなり叫んでんだ？」

「わからない、なぜか急に・・・で、なんでだい？」

「あー、俺が太らんのは体质で、」

「「ズルイ。」」

「・・・なんでイベントになつたかというと、あの妙な先輩の所為じゃね？」

まず最初は、俺がタバサを発見し勝負を挑んだ。

普段の食堂での食いつぶり、あれを見てしまつたら勝負するしかないだろ～う。

俺自身、大食いには自信もあつた。負けちまつたが、そこに現れたのが、

「勝負？ むわああかして！！」

どこからともなく、中指だけを起てメガネに黒髪ロン毛の男と学ランに下駄の男が現われた。二人ともマントを、いや学ランの方だけ唐草模様の風呂敷を付けている。

「げ！？トサカだ！？」

「こらこら、先輩を呼び捨てにするやつがあるか。」

と言いながら呼び捨てにした2年生にコブラツイストをかける。

「うむ、皆のもの準備を始めるのだ。あーるは米を炊け。」

そう言われ準備を始める人たち。

その間、俺は呆然としていた。

「しつかし、何でここにいたんだろ～う？ ここ春風高校じゃないよ

なー?」

あの後、二人は轟天号に乗り壁を突き破つてどこかに行つてしまつた。他の生徒、教師までもが、いつものことだという顔をしていた。

「何ぶつぶつ言つているのよ。それよりギーシュ踊りましょ!」

いつのまにか、雅やかな音楽が流れ始め、上級生が新入生の女の子にダンスを申し込んでいた。新入生の男どもは氣の弱い奴は壁の一部になり、勇気のある奴らは上級生のお姉さまに申し込んでいた。

「よつしゃ!食後の運動といきますか!」

立ち上がり、モンモランシーをエスコートしようとしたら

「いいなー。ハア」

マリコヌルが後ろで溜息をついている。

「なんだよマル、お前もいけばいいだろ? そんでも玉砕してこい。」

「つて、玉砕は決定なの!?」

「まあ、わからんけどな。とりあえず男だつたら突撃あるのみ!自分を信じるな!俺を信じろ!お前を信じない俺を信じろ!..」

「結局だめじゃないか!..」

俺とマリコヌルがギヤーギヤー喚いていると、天使が舞い降りた。

「しょうがないわねー。ギーシュの後で少しなら踊つてあげるわよ。」

「その言葉にピタッと止まる一人。

「本当かい!? モンモランシー!?」

「えー!? ハニーが、なんことしなくていいじやん!..」

感動し涙を流す馬鹿と文句をたれる馬鹿。

「私は早くギーシュと踊りたいの!そのためなら、少しだけなら慈善的なことをするわよ。」

「う、なんだか無性に悲しいよ。シクシク」

モンモランシーの言葉で天国から地獄に落ちるマリコヌル。

「ほら、行きましょギ「キヤアアアアアアアアアア」シユ。つて

今度はなんなのよ!..」

俺はいち早く事態を察知し悲鳴がしたほうに視線を向け、

「ウツヒョウー！」

感嘆の声をあげた。

「なにが・・・って、なあああああーー？」

モンモランシーは驚愕の声をあげた。

二人の視線の先には、見事なプロポーションを惜しげもなく晒している赤髪の痴女、もといドレスをバラバラにされたキュルケがいた。

「眼福、眼福 ありがたや、ありがたや

そう言いながら、パン、パンと拍手を打ち再度じっくり見ようとしたら

「つて、ちょっとギーシュ！何じろじろ見てんのよーー！」

我に返り俺の耳を引っ張りながら抗議するモンモランシー。

「痛い、痛い！ ちよ、耳が裂ける！－イタツ！－ 仕方ないじやん！ 男の本能は理性ではムリだって！ なあ、マルもなんとか言ってくれ。・・・・・マル？」

マリコヌルに助けを求めるが反応は無く、振り向いたがすぐ側にいたはずのデブはどこにも見えなかつた。

「あいつ、どこ行つた？」

とりあえず、この場を離れようと一歩歩いたら

ピチヤン

足元で鳴つた音に恐る恐る視線を下げる

「んげえ！？」

足元には、赤い絨毯より鮮明な、赤い血溜りに倒れ付すマリコヌルがいた。

「うわー、ハーメルンのライエルみてえ。おーい、生きてるかー？ 爪先でつんつんしてみるが、青い顔で鼻血を出し続けるだけで返事がない屍のようだ状態である。

「しょうがねえなあー。ハニー悪いけど、このデブ童貞を診てくれねえ？」

「・・・・・・・」

モンモランシーからも返事がなかつた。振り向き様子をみると、あ

さつこのせつを見てなにやらブツブツ眩いでいる。近くに寄り耳を側立ててみる。

「・・・やっぱり大きいほつが喜んでくれるよね。あの秘薬を験すときが・・・でも、もし副作用が・・・誰かを実験・・・あの子にしよう。あの子ならヴァリエールと違つて問題無・・・」「ハニー？ハニー？」

「あら？ なーに、ギーシュ？」

慌てて肩を掴みこつちに向けたが普段の顔になつていた。「いや、なんでもない、よ？」（聞き間違つた？ たぶん、いやそうに違ひねえ！ 黒いオーラなんて出てない！ 気のせいだ！）だが、幻想は現実の前にもろくも崩れ去る。

「そう。あ、ねえギーシュ。わつきのあの子は？」

「あの子って？」（やめてー！ 本当に怖いからやめてーーー）

「さつきのイベントで貴方に勝つた青い髪の子よ。どこに行つたか知らない？」

「い、いや知らんけど。タ、あの子になんかあんの？」（勘弁してくださいー！ 後生ですからーーー）

つい名前を言こせつになつたが何とかこいつえて怯えながらも問い合わせます。

「つづん。なんでもないわよ」

にこり、と笑顔であつたがその目が獲物を狙う鷹の目のようにあたりつけの目であつたがその目が獲物を狙う鷹の目のようにあつた。

女は怖い。特に、恋する女の子はスンゴク怖い。

祭りの前の馬鹿騒ぎ

舞踏会の翌日の深夜、生徒も教師も寝入つてゐる間に喧騒が生まれる。

黒焦げにされて悲鳴をあげていた。

その様子を塔の屋上から見てしる集団かした

たのに。

「ケケケ、勝負に『もし』とか『なんて』などないのさ。ほら、掛け金寄こせよレインアール。みんなも。」（ま、ズルしてんだけね。ああ、原作を知つてはいるつて得だなー。）

悔しそうにした後、1エキュー金貨を投げ渡すメガネをかけた少年
レイナール。

それに続き他の少年たちも投げ渡す。顔面掛けで投げる奴もいる。
「まいどまいど 後はマルとギッちゃんだな。マル掛け金よこせ。」
「か大丈夫か?」

うん、大丈夫だよ。あれ? いくら、だ? げ?」

「10Hキューだよん」

マリコヌルの間に、いい笑顔で答えることにした。

マリコヌルからちょろまかし、最後の一人に声をかける。

「…………ギーヤん。」

ボケーと未だに炎の殺戮を眺めているギムリ。ガキの頃からの付き合いでも、ギーちゃんギッちゃんなど呼び合ひの俺達。ですが、なんだか様

子がおかしいです。

「どうしたの？」

「・・・ほれた。」

「はい？」

「あのキュルケって子に惚れちまつた！俺のハートに火をつけられちまつた！なあ、ギーちゃん協力してくれ！あの娘と俺がウエーディングロードを歩むために！！」

ヤバイ、田がマジだ。

「えーと、うん。ま、まあ、がんばれや。応援はするよ。・・・

・一応。」

原作みらいを知つていてもこんなときはビリすりやいいんだ？応援しても結局バットハンドは見えているし、なんとかあきらめてもらつか。

「あのー、ハニー？ ちょっと、相談があるんですけどー？」

「・・・さか、あんな・・・強いなんて。どうや・・・のませる・・。そうだ！だれかメイドにでも頼んで料理に混ぜればいいんだわ。フフフ、明日を楽しみにしていなさいよ！オーホホホホ！」

最初は聞こえない位の声だったのに、最後はどこぞの悪の女王のように高笑い。

ギムリの事で相談してみようと思つてたのだが、

だめだ、スイツチが入りっぱなしだ。

「ハアーー」

溜息をついていると、レイナールが焦りの表情でこっちに近づく。「おい、ギーシュ。溜息ついてる場合じゃないぞ。あの一人がこっちに近づいて来るー」

「マジで！？ テメエラバツくれんぞ！ レイナールはマルを頼む。おれはハニーとギッちゃんを」

「わかった。」

言い終わる前に返事をし、マコロヌルに駆け寄るレイナール。手隙

の奴らも逃げ始めている。残りの一人は事態が分からずボケーとしていた。

「ギーちゃん、なんで逃げるの？」

「こんなところで覗いてたってばれたら、あの燃やされた一人のお仲間扱いだぞ？」

「あーなるほど。」

ポンつと手を打つた後、慌てて逃げ出すギムリ。

「ほら、ハニーも！」

「え？ え！？」

モンモランシーの手を取り駆け出す。

程なくして屋上は無人となつた。

キーンゴーンカーンゴーン

「はい、それでは午前の授業を終わります。明日は火の魔法の活用とその歴史をやりますので、予習復習をしっかりやってください。」頭が荒野のゴルベール先生が授業の終わりを告げ教室から出て行く。それを合図に生徒たちも立ち上がり食堂に向かう。

「ふあわあー。あーよく寝たよく寝た。さてメシにすつか。」

「まったく。よくあんだけ堂々と寝れるわね。ミスター・ゴルベールも困つてたわよ。」

廊下を歩きながら小言を言うモンモランシー。その二人の後ろでは「しつかし、昨夜は面白かったな。あのヴィリエの顔を見たか？」

「見た見た！面白すぎて夢に出るかと思つた！」

「あの後、朝になるまで塔から宙吊りになつてたんだよー。」

「ぎやははははは」

昨夜、一緒に見に行つていた仲間が昨夜のことで盛り上がつていた。そして、食堂の入り口に差し掛かつたところで

「ちょっといいかしら？」

「へ？」

「げつ！？」

仲間の一人が振り向いた先には、昨夜ヴィリエ達を黒焦げにした張本人キュルケが立っていた。

「ミスター・グラモンに用があるんだけど。」

その言葉と同時に仲間の視線がギーシュに集まる。

「おれに？」

「ちょっと、ギーシュ！？」

「あー、大丈夫だよハーー。先に行ってくれ。」

「う、うん。わかつた。」

返事をし、他の仲間と共に食堂に入るモンモランシー。一度だけ振り向いたが、その目は怪我をさせたら許さないとキュルケには感じられた。

「場所を変えましょうか。」

「ああ、そうだな。」

誰もいない庭のさらに奥、人が滅多に来ない場所に二人が着いたらすでに先客がいた。

昨夜の主役のもう一人タバサがいた。

二人を交互に見ながら

「それで？ 僕に用つてのは？ まさか愛の告白！？ でも残念！
俺にはハーーがいるからあきらめてね？」

冗談にぴくりともせず白けた目で見るキュルケとタバサ。

この気まずい空気が永遠に続くかと思った矢先、タバサが一步踏み出した。

「あなたは昨夜見ていた。」

「うへ！？ まああんだけ騒げばいやでも・・・」

「最初から気付いていた。」

「マジ！？ スゲー耳やなー。」

タバサとのやり取りのあと、キュルケが動き出す。

「どうやらヴィリエの言つとおりみたいね。ミスター、いえ、ギーシュ・ド・グラモン！

今までの仕掛けはあなたが黒幕ね！！」

「ハアアアアアー！？」

「ヴィリエが全て吐いたわ！まったく手の込んだことするわよね？ドットがトライアングルを怒らせたらどうなるか、この『微熱』が教えてあげる！！」

「ちょっとま・・・」（あのクソボケ！最初からこれが狙い・・・）

「問答無用！－ファイア・ボール！－」

詠唱とともに『デカイ火球』が迫る。

「だあああ！？」

横つ飛びでなんとかかわし杖を抜く。

「あぶねーだろ！少しばはこつちの話も聞けーーー！」

「問答無用と言つたはずよ？もう一丁ファイア・ボール！」

「クソ！ サンド・ウォール！」

キュルケの火球と砂の壁がぶつかり火炎と砂煙が舞う。火炎は收まるも砂煙は未だ收まらず二人の視界を覆う。

「日晦ましのつもり？ そんなのまとめて吹きとば・・・きや！？」
いきなりキュルケの足元の地面から四本の鋼鉄の触手が飛び出し手足を拘束する。

「ウインド。」

タバサが風の魔法で砂煙を払うと、三体の『ゴーレム』を従えたギーシュが立つていた。

「ちょっと！放しなさいよ！－！」

「ケツケツケツ！人の話を聞かない悪い子にはお仕置きが必要やな
ー？行け、アッグガイ！－！」

「ヒイイイ！？ イヤアアーーー！」

両腕に四本のヒートロッドをもつアッグガイ一體がキュルケに迫る。計八本の鋼鉄の触手がキュルケの体の上を怪しく艶かしく蠢ぐ。

「イヤ！？ダメ！－そこはまだ・・・誰にも触らせた事も・・・ウ
ツ・・・ヒグ・・・・」

泣き出すキュルケを見て理性がほんの少し外れるギーシュ君。

「ギャハハハツ！－－やーて、次は『フフ！－？』

「やりすぎ。」

前回よりも力をいれて殴ったタバサがギーシュの後ろに立っていた。

「ナ、ナイス・・・ツツコ!!。」

倒れながらも賛辞を送るギーシュに持っている杖をおもいつきり振り下ろすタバサ。

「トドメ。」

「ガフツ」

「・・・ヒグ・・・・ヒグ・・・・ウーン。タバサ。」

「よしよし。」

泣いているキュルケをあやしているタバサ。とても微笑ましい光景です。

「えーと、したら誤解は解けたってことで？」

タバサ、そしてキュルケに殴られ蹴られ踏み潰され倒れ付したギーシュ。

「そんなわけないでしょ！待ってなさい！今燃やし切くしてあげるから！」

「待つて。」

怒りの炎で燃え上がるキュルケをタバサが制す。

「彼は違うと思う。」

「そうそう！ちゃいまんがな、ちゃいまんがな。」

ギーシュの発言に、キツツと睨みつけるキュルケ。慌てて死んだふりをするギーシュ。

「それで？なんか理由があるの？」

キュルケの問いにうなずくタバサ。

「第一に彼の戦闘の動き。防御と田舎ましを同時にい、尚且つあなたの位置を精確に突き拘束した。これは彼が戦闘に馴れている証拠。

第一に彼はあなたを傷つけようとはしなかった。少し破廉恥な行動

だつたけど。」

「十分破廉恥で、外道だつたわよ！」

そう言いながら視線をタバサからギーシュに移し睨みつけるキュルケ。死んだふりをしているギーシュはピクリともしない。

「第三に彼の魔法。この前のド・ローネスとの決闘で彼は不可視の風の魔法をかわした。そして、このゴーレム。ドットのメイジで鉄のゴーレムを創るのは無理。尚且つ、鉄の鞭でありながら相手の体に締め跡もつけない程の纖細な操作。少なくともラインの上位、もしくはトライアングルクラス。」

「なつ！？この変態が！？」

タバサの推測に驚くキュルケ。そんなキュルケにかまわず続けるタバサ。

「第四は、そー。」

と、いい終わると同時に氷の矢を少し離れた茂みに放つ。

「うあわああああー！？」

「あー、ヴィリエー！」

悲鳴と共に転がり出てきた者の正体に再度驚くキュルケ。

「あん？ ヴィリエだとー！？」

今まで死んだふりしていたギーシュも起きだす。

「なぜここに？」

冷静に詰問するタバサ。三人に囲まれ冷や汗以上の汗をかいているヴィリエ。

「い、いや。き、君たちがギーシュを成敗すると聞いて……」

「あら？ だれに聞いたのかしらー？ あたし達二人しか知らないのに。」

「

「そ、それ・・・は・・・」

キュルケの言葉にオロオロするヴィリエ。そして、タバサがトドメをさす。

「彼を殴つているとき聞いた。『やまあみろギーシュ』の前の仕返しだ。』

「なー? まさか聞こえてー!?

「うそ。あのときは殴るのに夢中でなにも聞こえてなかつた。」

「は、はめやがつたなー!?

激昂しタバサに殴りかかるつとするヴィリエの前に一つの影が遮る。

「セー! ヴィリエちゃんよー。覚悟はできてんだろ? なー?」

「セうよね。しかも、こんな可憐なタバサに殴りかかるなんて親友として黙つてないわよ?」

笑顔で迫る一人に後ずさるヴィリエ。そしてニヤリと笑い同時に言い放つ。

「ブ・チ・コ・ロ・シ・か・く・て・い・ね」

「なあ、キルケ。いやミス・ツェルブスター。訊いてもいいか?」

ヴィリエをボロ雑巾にした後、三人は食堂に向かつている。その道すがらキルケにある事を尋ねるギーシュ。

「キルケでいいわよ。それでなによ、ミスター・グラモン?」

「ああ、なら俺もギーシュでいい。でだ、お前まだ処女な イデエー!」

「破廉恥。」

「なによ! 悪いの?」

乙女の秘密に十足で上がり込むギーシュに、杖による鉄拳制裁をするタバサと秘密を知られ憤慨するキルケ。

「イテテ。いや、なんつーか以外だつたから。」

「お生憎様。あたしは本物を求めているの。身も心も焦がす本物の情熱を! そちらのポンクラ貴族の息子に許すわけないでしょ?」
との、キルケの言葉に顔を見合させ考え込むギーシュとタバサ。答えが出たのか同時にポンと手を打つ。

「それはつまり、『初めでは好きな人じやなきや、いやん』でことだな。」

「乙女チック。」

「え? ちよつ! ? あ~もう! ? それでいいわよ! !」

一人の指摘に赤面しそっぽを向くキュルケ。そして、タバサはギーシュの方に顔を向けジックと見つめる。

「わたしも尋ねたいことがある。」

「ん？ な、なんだい？」（ヤベ。俺またなんかドジックたか？）

「なぜ魔法の実力を隠していたの？」

「なぜ？と訊かれたなら答えよう…そのほうがかつっこいからだ…！」

某、ブランボーな人のよつてにジックとポーズを決め答えるギーシュ。

「そう。」

「馬鹿じゃないの？」

一人の感想にガックリと肩を落とすギーシュ。

「あー、あたしも聞きたいことがあるー！」

そんなギーシュを見て、気を良くなしたキュルケは思い出したかのように質問をする。

「あー？ あんだよー？」

「あなたの『二つ名』よ。まだ聞いてなかつたし。ちなみにあたしは『微熱』。タバサは『雷風』よ。」

キュルケの質問に暫し考え答える。

「あー、無いな。うん。」（前に使つてたのならあるけど、あれを名乗つたら手が後ろに廻るしなー。）

「なら、あたしが付けてあげる。そうねー、『変態』のギーシュはどう？」

「蝶却下。」

「なによ？ ピッタリじゃないー。」

「アホかおまえはー？」

睨み合う二人にタバサがボソッと声を出す。

「『独眼』。」

「へつ？」

「あなたの創るゲームは、形は違つけど全でが一つ皿とこう共通点がある。だから

『独眼』。」

(どこの筆頭ですか? それは。)

両手に六本の刀を持つバサラな侍のコスプレをしている自分をイメージ、意外とイカレるやない?と考えるお馬鹿なギリシモ。

「『虫眼』のギニシゴニー。なんどか面前負けてやつたが、

「俺は気に入つたぜ！ ありがとう、タバサちゃん。」

— . . . —

感謝の言葉を受け困惑するタバサ。そんなタバサをみて微笑みながら

ラギー・シードに聞いかけるサニーラゲー

「なんて夕ハサには、『せやん』付けなのよ?」

「遠慮しちゃわ。」

嫌そうに答えるキルケに、ギーシュは一人から数歩前を歩き、くるりと二人に振り向く。

「あ、話は変わるけど、一人ともども、やべり口の奴があきらめたとは思えないし。そこで提案なんだが、ダラーズに入らないか?」

キエルケニアラーズのことを簡単に説明する。

?

「…わかつた。」

少し考えてから返事をするタバサ。

（これでリバウンドすれば、また喜び、樂（ゆきば））

「ねえ、ついで

キユルケがダラーズのことで訊ねようとしたら、食堂のほうから大

勢の絶叫が鳴り響く。

「なに!?」

「・・・・・! ?」

驚くキュルケとあたりを警戒するタバサ。しかし、ギーシュだけは違つ反応をする。

「あ!忘れてた!」

「・・・なに?」

訝しげにギーシュを見るタバサ。

「ふふふ。実はねー、俺のハニーが作った秘薬の実験をやつたんだ。本当は女の子に飲ませる物なんだけど、どんな副作用があるか解からないらしくて。それなら男に試してみようと俺は考えて実行したのだ!」

「・・・勝手に?」

「そうだよん!」

タバサの問いにケロツとした顔で答えるギーシュ。

「ギーシュ・・・あなたつて」

「・・・鬼。」

一步引きながらギーシュを見る一人。

「何を言つ! もし副作用があつて女の子に傷をつけたら男が廃るつてもんだ!! そのためにマルの一人や一人や百人犠牲にしたつてかまわんやろ?」

そう、モンモランシーの暴走を止めるためにマリコヌルが尊い犠牲になつてくれたのだ。どうやつて飲ませたかと云うと、メイドの一人に頼み込み(+ 依頼金)で、マリコヌルの飲み物に混ぜてもらつたのだ。ありがとうマリコヌル。

「さてと、腹も減つたしマルがどうなつた見に行こうぜ!」
食堂に駆け出すギーシュ。残る一人は呆然としながら立つていた。しばらくしてからタバサが口を開く。

「彼が黒幕でないと推測した最後の理由がある。」

「聞かせてちょうだい。」

「彼はあのような計画をねるタイプではない。どちらかといふと物事を深く考えないタイプ。」

「それって馬鹿ってこと?」

「・・・そう。」

「はあ、あんなのがいるならダラーズのリーダーって器が大きいのか、それとも同じような馬鹿なのかしら?」

「・・・彼がリーダー。」

「入るの間違ったかしら?」

「・・・同感。」

「なんで効果が現れないのよーーー!」

実験をした日の深夜、金髪ロールの少女が自室で怒声を上げている。見事な巨乳になつたマリ「ヌルを調査し副作用は特になかつたため、タバサを含め胸に自信の無い娘達はモンモランシーの秘薬を求め奪い合い、なんとか全員に行き渡り服用した。

結果は御覧のとおりだが

「うーん、なんで効かないんや?同じように飲んだのに?」

「わかつたら苦労しないわよ!ー!」

「やっぱあれか?マルの奴だから効果があつたんかなー」

「そんなこと・・・ありえるかも。」

ギーシュの言葉に何故か納得するモンモランシー。

「うー、せつかくギーシュに喜んでもらおうと思つたのに」

「なあ、ハニー?俺は、胸が大きい娘は確かに大好きや、でもなハニーの胸も大好きなんや!」

「ギーシュ、でも」

「それに秘薬で大きくするなんて反則だ!大きくなりたいなら俺がしてやる!さつそく今夜から頑張つちゃうよーー!」

「・・・ばかーーー!」

バカップルの夜はいつもこんなものである。

「・・・うふふ、イザベラに勝つた・・・すう、すう」

秘薬を飲んだ後、すぐに寝入つたタバサは知らない。

従姉妹姫に勝つた夢を見ているのだろうが、朝、目覚めた時現実に耐えられるだろうか・・・

「胸が、胸が・・・はあ、はあ・・・」

マリコヌルの部屋からとても気持ちの悪い声が聞こえる。

なにをしているかは、誰も知らないし知りたくも無いであろう。

ちなみに、マリコヌルの胸は一ヶ月後に元に戻るが、その間、女生徒からの冷たい目線で更なる進化を遂げたのだ。

祭りの前の馬鹿騒ぎ（後書き）

学校の体育館のステージ
演劇用の幕が張っており、スルスルと開いていく。

ギーどうも！ 今作主人公のギー シュでーす！」

サ「原作主人公のサイトです。」

ギ サ 「 「 二人合わせて！！」 」

ギ「ハートキヤツチ！プリキュアでーす！！」

サーナンデだよー！？

『しまつた！ 一人足りない！』

サーソレヅヤなしたゾ!! 一ソヒツとこでおかしだゾ!!?

井・井お
それに置して上

「置いとくのかよ。」

その回の講で讲じたがくそ

卷之三

ナニヤウム

卷之三

「アーニー、お前が魔界の魔物を倒すのが上手だな。」

「始まりだぜ？ 二次創作とはいえやつぱうれしいだろ」

まーす

「なんだ？」

カ「な?」は? で?」

元々外は七口魔なる。七口魔といふは俺と
サムは？ なんで？ これ ルイズだろ？

ギ「理由があるんですねー理由がー」

サ「なんだよ理由つて？」

ギ「ゼロ魔の19巻でたじやないですかー」

サ「出たよ？それがなんだよ？」

ギ「そこで君は見てはいけないものを見てしまったのだよー。サ「え？なにそれ？19巻でいつたら俺とテファがエルフに攫われて、エルフの国から脱出しようとして、いけ好かないエルフと戦つて、その途中でテルフが復活して・・・」

ギ「どうした？続けるよサイト」

サ「えーと、まさか・・・」

ギ「その。ま・さ・かだよー。」

サ「はあー？そんな理由でー？」

ギ「ばかやろひーー。」

サ「いでええー？」

ギ「てめえが見てしまったものが、どんなだけスンゴイものかわからんのか？あのシーンの挿絵が無く血の涙を流した全国五千万の読者に謝れ！」

サ「知るかボケ！大体、おれが出ないとして誰が出るんだ？こまさらオリキヤラか？」

ギ「候補は出でーる」

サ「あるのー？」

ギ「うむ。とある“幻想殺し”をもつた不幸な

サ「ちよつとまてえー！他作品どころか出版社も違つじやないか！。」

！」

ギ「しかし、問題があつてなー」

サ「だよねー。その手のネタはもうあるし。やつぱおれが

ギ「いやいや、作者は狂がつくほどの上条×美琴派でなー。上条さんと美琴をこんな作品とはいへ、離れ離れにしたくないと

サ「どうでもいいー。」

ギ「バカヤロウーー。」

サ「またあー？」

ギ「作者はな信じてているんだ！ 真のヒロインは美琴であると……最後は上条美琴になると信じているんだ……！」

サ「あー、もうわかつたよ。それで？ 候補であつて確定じやないんだな？」

ギ「まあ、そうだな。作者がなにをするか作者自身まだ決まってないし」

サ「大丈夫なのか？ てかいいのか？ 仮に上条さんが出たとして、これはお前が主役だろ？」

ギ「俺は作者の分身みたいなものだ。上条さんが出るなら主役を譲つてもかまわん！」

サ「あー、そう。 ん？ カンペ？」

ギ「なんだ？」

サ「時間も無いので一発ギャグをやれって書いてる」

ギ「なんかネタあるか？」

サ「急に言われてもなー」

ギ「しゃーないなー。」これは一つ俺が。あーゲフンゲフン

ギ「ルルーシュ！」

サ「中の人ネタかよ！」

ギ サ「「どうもありがとうございました！」」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3985m/>

転生！？ギーシュ・ド・グラモン珍道記

2010年10月8日15時00分発行